

四條畷市埋藏文化財包蔵地調査概報 21

# 中野遺跡発掘調査概要・Ⅲ

——四條畷市中野所在——

1986・3

四條畷市教育委員会

四條畷市埋藏文化財包蔵地調査概報21

# 中野遺跡発掘調査概要・Ⅲ

——四條畷市中野所在——

1986・3

四條畷市教育委員会

## は し が き

中野遺跡発掘調査概要Ⅲは四條畷市役所より南々東約300mの位置にあり、最近まではゴルフ練習場として利用されていたのであったが、このたびマンション建設の計画がなされ、建設工事に先立って行ったのが以下に報告する調査であった。

共にこの時代の須恵器、土師器の各種の土器の出土をはじめ、特に白玉100点以上、有孔円板等石製品の出土が目立った。住居址は確認することができなかつたけれども柱穴と思われるピットが8ヶ所発見されている。

四條畷市役所南一帯の中野遺跡は標高約13m、清滝川を北に控えて、古墳時代を中心に井戸、溝等の遺構がすでに検出されており、当遺跡の調査は、さらにこの時代の中野遺跡の解明により貴重な資料を得たこととなった。

調査に当っては、大阪府教育委員会のご指導と共に、西村 完氏の深いご理解とご協力をいただいた。ここに深く感謝の意を表する次第である。

### 四條畷市教育委員会

教育長 櫻井敬夫

## 例 言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が昭和60年度に四條畷市中野本町1番20号株式会社四條畷地所 代表取締役 西村 完氏より委託を受けて実施した四條畷市中野新町844-2他3筆に所在する中野遺跡発掘調査概要Ⅲの報告書である。
2. 調査は、昭和60年7月8日に着手し、昭和60年8月31日まで発掘調査を行い、昭和61年3月31日までに昭和60年度調査事業を終了した。
3. 発掘調査は、教育委員会社会教育課技師・野島 稔を担当者とし、調査補助員として福西啓仁、深江信邦、片岡利博、出口彰良、原本義秀、川口典之、江角武彦があたった。  
出土遺物の整理・実測などについては、野島、川口、福西、出口、川本三智子、秋山敬子、泉 節子、田嶋智子、林 百合子、植村千穂、勝目郁子、羽田マナ子、西川裕理、中島かおるがあたった。
4. 本書の執筆は、野島 稔が行った。
5. 発掘調査の進行・報告書作成などについては、大阪経済法科大学・瀬川芳則、大阪府教育委員会・堀江門也、玉井 功、寝屋川市教育委員会・塩山則之、西尾 宏、財団法人枚方市文化財研究調査会、畷古文化研究保存会・四條畷市小中学校教育研究会社会科部会の諸機関、諸氏から種々のご教示をうけた。又、発掘調査については、西村 完氏の終始懇切なご協力をうけることができた。明記して厚く感謝の意を表したい。

# 本文目次

はしがき

例言

第1章	調査に至る経過	1
第2章	遺跡の位置と歴史的環境	3
第3章	調査概要報告	6
	A. 基本層序	7
	B. 遺構	7
第4章	出土遺物	12
第5章	まとめ	17
第6章	掲載遺物観察表	19

## 挿入目次

- 第1図 中野遺跡調査地位置図
- 第2図 中野遺跡周辺遺跡分布図
- 第3図 シャルマン四條堰建物配置図
- 第4図 中野遺跡遺構配置図
- 第5図 中野遺跡井戸状遺構内遺物出土状況平面実測図
- 第6図 中野遺跡出土遺物実測図

## 図 版 目 次

- |       |                        |
|-------|------------------------|
| 図版 1  | 中野遺跡周辺の航空写真            |
| 図版 2  | 中野遺跡調査前・後全景            |
| 図版 3  | 中野遺跡井戸状遺構検出面及び上面遺物出土状況 |
| 図版 4  | 中野遺跡井戸状遺構遺物検出状況        |
| 図版 5  | 中野遺跡井戸状遺構下面遺物出土状況      |
| 図版 6  | 中野遺跡井戸状遺構下面遺物出土状況      |
| 図版 7  | 中野遺跡掘立柱建物内土器出土状況       |
| 図版 8  | 中野遺跡構内遺物出土状況           |
| 図版 9  | 中野遺跡 A 地区全景及び井戸状遺構全景   |
| 図版 10 | 中野遺跡出土遺物・I             |
| 図版 11 | 中野遺跡出土遺物・II            |
| 図版 12 | 中野遺跡出土遺物・III           |
| 図版 13 | 中野遺跡出土遺物・IV            |
| 図版 14 | 中野遺跡出土遺物・V             |
| 図版 15 | 中野遺跡出土遺物・VI            |
| 図版 16 | 中野遺跡出土遺物・VII           |

# 中野遺跡発掘調査概要・Ⅲ

## 第1章 調査に至る経過

中野遺跡は、昭和52年度に国道163号と国鉄片町線との交差する地点より西側、国道の南側道下において大阪瓦斯天然ガス管理設に伴う埋蔵文化財発掘調査において、古墳時



第1図 中野遺跡調査地位位置図 (S=1/2500)

代中期の大溝と鎌倉時代から室町時代の石組井戸、溝状遺構等が検出された。大溝の規模は溝幅幅約4m、溝底幅約1.2m、深さ約1.4mの南北方向に流れる大溝内から、土師器壺・朱塗壺・須恵器坏身・坏蓋・無蓋高坏・壺・器台や滑石製紡錘車・有孔円板・白玉・馬の下顎・馬の歯・植物種子とともに約1000点を越える製塩土器が出土したことから古墳時代と鎌倉時代から室町時代にかけての複合遺跡であることが判明した。その後国道163号の拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を昭和52年10月から昭和53年5月までの2年度にわたって実施した結果、古墳時代後期の溝状遺構、平安時代の掘立柱建物跡、大溝、鎌倉時代から室町時代の井戸をそれぞれ検出した。古墳時代の溝状遺構内から須恵器坏身・坏蓋とともに硬玉製勾玉・滑石製勾玉・白玉・有孔円板が出土した。また平安時代の掘立柱建物跡は東西3間(約7.6m)で東西柱間寸法は、建物東柱から320cm、120cm、320cmの間隔を置き一直線上に位置し柱痕跡には扁平な根板や花崗岩の栗石が置かれていた。中世の井戸は中野遺跡で5基の井戸が検出しており、井戸の種類には曲物だけで井戸枠を積み上げたもの、石組と曲物をあわせたもの、石組だけのものがあり、国道関係では石組+曲物と曲物だけのもの、石組だけのもの合計3基検出している。石組+曲物の井戸内から、口径5.7cm、器高2.3cmの影徳鎖系統の窠産の合子が出土し、又、石組井戸内から挽き臼1対が鉄芯棒及び支持木も完全な状態で出土した。石臼の石材は花崗岩で整然とした八分画五溝式で回転方向は左まわし(反時計廻り)である。その後国道163号と片町線との交叉する西北側において大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴う第2次調査において、隅丸方形を呈する周溝が検出され、周溝内から最古型式に属する須恵器坏身・多量の漆がつままったままの把手付埴・硬玉製勾玉・滑石製勾玉・紡錘車・白玉・有孔円板・木製剣・木製刀・蓆編具・製塩土器が出土している。

又、片町線複線化に伴う調査、国道163号拡幅、民間宅地建設等において東西約600m、南北約400mに広がる古墳時代中期から後期にかけての大集落跡が検出されている。

今回の調査地は昭和52年度に大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴う調査地の南約200mに位置し、四條畷市中野本町1番20号、株式会社四條畷地所、代表取締役 西村 完氏から昭和60年2月28日にマンション2棟の建設予定の計画が四條畷市に提出され、各関係部局との協議がなされた。市教育委員会として、今回のマンション予定地に市開発指導要項に基づき試掘調査を実施する旨を西村 完氏に伝え、昭和60年6月3日に遺跡の有無及び基本層序を正確に把握するための試掘調査を実施した。

この場所はゴルフ練習場であり、試掘調査の結果、芝生の下層に盛土が約10cm、その下に旧耕土、床土、褐色砂質土層、地山と続く基本層序であり、褐色砂質土層内から土師器、須恵器片が出土し、一部に溝状遺構を検出した。試掘結果に伴い文化財保護法第57条第2項の届出を大阪府教育委員会及び文化庁へ提出され、昭和60年7月8日から8月31日まで予定で本格調査を実施した。

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

中野遺跡は大阪府四條畷市中野本町から中野新町にかけて所在する四條畷市は大阪府の北東部に位置し、東は奈良県に、西は寝屋川市、南は大東市、北は交野市に隣接する東経135°38'、北緯34°44'にある。地勢の東半分は生駒山系支脈の山地で、主として第3期花崗岩によって形成された地質である。西部平地地はこれら山地から流出した砂礫による沖積層となっている。

本市のほぼ中央を南北に通じる東高野街道、東西に通じる清滝街道沿いには中世の掘立住建物跡・井戸・溝等の遺構が存在し、中世村落が栄えていたことがうかがえる。このように四條畷は陸路交通の要地として地理的に重要な位置を占めていたことは、多くの遺跡の存在によっても推測できる。

当遺跡は生駒山系の西側斜面から流出する清滝川と江瀬美川に挟まる台地上にある。この清滝川と江瀬美川は寝屋川を経て大阪湾に注いでいる。

生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は八幡丘陵から南は南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵、段丘があり、この枚方台地は大きく北から枚方市船橋川・穂谷川・交野市天野川・寝屋川市寝屋川・四條畷市讃良川・清滝川という中小河川によって開かれている。この枚方台地には原始・古代の幾多の遺跡の存在が知られている。

枚方台地の旧石器時代遺跡としては、現在のところ20遺跡が知られており、特に国府期のナイフ形石器・有舌尖頭器が出土している枚方市楠葉東遺跡、ナイフ形石器・小型舟底形石器・石核が出土した津田三ツ池遺跡、細石器・石核が出土した藤阪宮山遺跡、国府型ナイフ形石器・石核が出土した交野市神宮寺遺跡、ナイフ形石器・細石器・削器・彫器・礫器等を出土した四條畷市更良岡山遺跡、木葉状尖頭器が出土した岡山南遺跡、有舌尖頭器を出土した南山下遺跡が知られている。他に表面採集された寝屋川市打上、四條畷市忍岡古墳附近においてもナイフ形石器が採集されており、旧石器文化研究上枚方台地はきわめて重要な位置をしめている。

又、縄文時代遺跡としては、米粒文、山形文を施した押型文を特徴とする土器が出土する交野市神宮寺遺跡、四條畷市田原遺跡、東大阪市神並遺跡があり、又、枚方市穂谷遺跡、でも早期の土器が発見されている。

又、前期の石器のみ採集された津田三ツ池遺跡も知られている。

中期の渦巻文や半截竹管文をもつ船元式土器を出土する四條畷市南山下遺跡・砂遺跡、交野市早田旭遺跡があり、後期・晩期のほぼ完形の高杯形土器・深鉢形土器・注口土器・土製勾玉・土偶等多量の土器・石器が出土する四條畷市更良岡山遺跡、岡山南遺跡・清滝古墳群周辺においても石鏃、深鉢形土器が出土する。

枚方市交北城ノ山遺跡においては滋賀里式系の深鉢形土器を転用した埋壘遺構が発見さ



第2図 中野遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)

- |          |             |          |
|----------|-------------|----------|
| 1. 雁屋遺跡  | 3. 中野遺跡     | 5. 墓の堂古墳 |
| 2. 奈良井遺跡 | 4. 四條小学校内遺跡 | 6. 塚脇遺跡  |

れている。

弥生時代については四條畷市雁屋遺跡から畿内第Ⅰ様式中段階の高さ約67cmの大壺が出土しており、古代河内湖の時代で最北端で発見され北河内で最古の遺跡と知られていた。その後雁屋遺跡から弥生時代中期中葉の方形周溝墓4基が検出され、木棺墓20基、土器棺1基が発見された。木棺はコウヤマキ材の4基が完全な形で検出され方形周溝墓研究に重要な資料を提供することができた。又、寝屋川市高宮八丁遺跡でも雁屋遺跡の前期に並行する畿内第Ⅰ様式中段階から中期前半のⅡ様式にかけての遺跡も発見され、また四條畷市田原遺跡においても前期末、畿内第Ⅰ様式新段階の壺が出土し古代河内湖縁辺の弥生時代前期の遺跡が相次いで発見されつつある。

中期初頭の畿内第Ⅱ様式の時期に出現する高地性集落の寝屋川市太秦遺跡や第Ⅱ様式～第Ⅳ様式に認められる直径11.5mの巨大な竪穴式住居跡をもつ田ノ口山遺跡、交北城の山遺跡で第Ⅱ様式から始まる方形周溝墓42基・竪穴式住居跡8棟・土壇・高床式建物跡が検

出された場所は穂谷川水系沿いに立地している。

後期の第Ⅴ様式になると枚方市・交野市・寝屋川市の淀川左岸地域においては数多く点在する。代表的なものとしては、小型仿製鏡や分銅形土製品が出土した枚方市鷹塚山遺跡、六角形の竪穴式住居跡が発見された枚方市山之上天堂遺跡、鹿の絵の線刻した土器が出土した枚方市藤田山遺跡、住居と墓道をV字溝によって分離した枚方市星ヶ丘西遺跡、一棟の竪穴式住居跡から鉄鍬を含む53個の鉄器片が出土した枚方市星ヶ丘遺跡等があげられる。

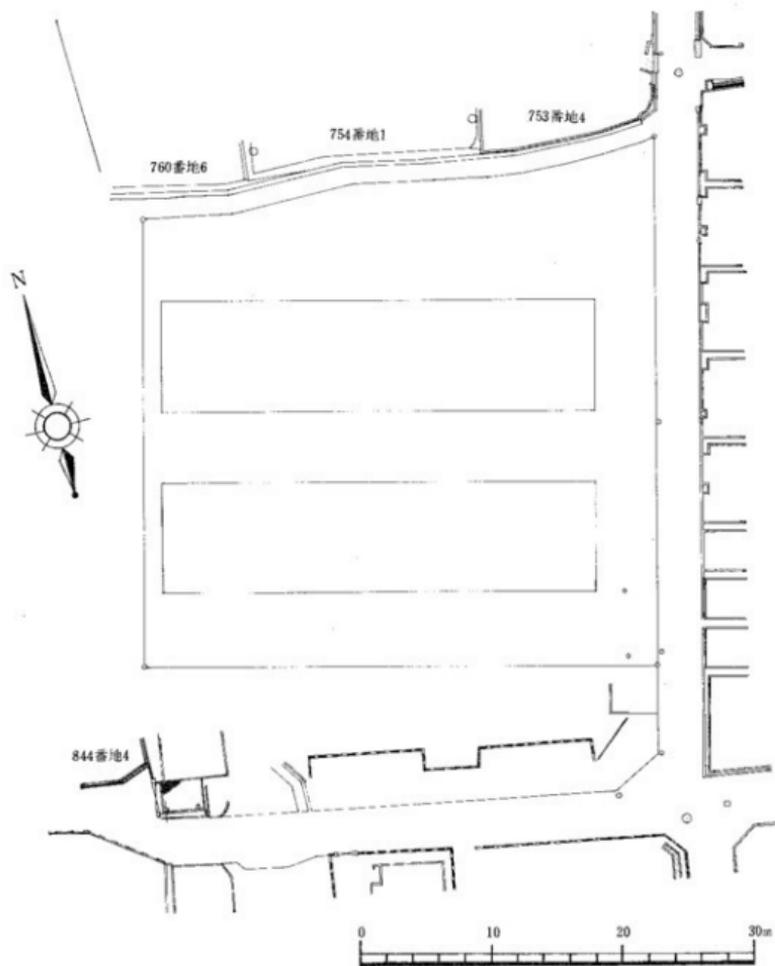
古墳時代について見ると、眼下に淀川を見下ろす水運との関係を考えなければならない枚方市万年寺山古墳から8面の銅鏡が出土している。また直径25mの円墳と考えられ画文帯環状乳神獸鏡1面・銅鏡6本・鎌形石製品2個他を出土した枚方市藤田山古墳、粘土椀内から硬玉製勾玉・ガラス製小玉・碧玉製管玉・鉄剣・刀子を出土した交野市妙見山古墳、全長約90mの前方後円墳で後円部に長さ約6.3m幅約1mの竪穴式石室を今なお見ることのできる四條畷市忍岡古墳がある。

交野市の森古墳群から前方後円墳と円墳を含む8基の前期古墳群が確認されており、眼下に巴形銅器・筒形銅器を出土した交野市車塚古墳、中期になると枚方市禁野車塚古墳、牧野車塚古墳、四條畷市墓の堂古墳がある。後期になると生駒山系西麓に数多く分布しており、特に大東市堂山古墳群・四條畷市清滝古墳群・更良岡山古墳群・交野市寺古墳群・倉治古墳群・枚方市中宮古墳群・白雉塚・比丘尼塚・北河内最大の横穴式石室をもつ寝屋川市寝屋古墳、終末期には国史跡指定されている石ノ宝殿古墳がよく知られている。

古墳時代の集落跡の発見は、四條畷市が大半を占めている。四條畷市岡山南遺跡の大溝内から切妻造りの家形埴輪に5個の緊魚木をつけたものや、円筒埴輪・蓋形埴輪・動物形埴輪とともに木製下駄も出土している。中野遺跡においては5世紀後半の製塩土器や最古形式の須恵器とともに勾玉・白玉・紡錘車・木製剣が多量の土器とともに出土している。隣接地の奈良井遺跡には実際に製塩作業を行った石敷製塩炉及び1辺約40mの方形周溝遺構の祭祀場が検出し、周溝内から多量の土器とともに手捏ね土器・人形土製品・動物形土製品・滑石製品がそれぞれ一括で出土している。又、同一溝内から小型の蒙古系馬が埋葬されていた。古代から中世にかけての遺跡は各市において数多く知られている。

### 第3章 調査概要報告

今回の第7次調査地点は、四條駿市中野新町844-2他3筆で、西村ゴルフセンターとして昭和60年6月まで営業されていた場所に4階建マンション2棟が計画され、昭和60年6



第3図 シャルマン四條駿建物配置図

月3日に建設予定地内に東西2m、南北1mの試掘穴2ヶ所を設定して遺構の有無及び保存状態と基本的な層序の確認を行った。

区画設定は西村ゴルフセンター南東隅に設置されている四條畷市公共下水道のマンホール中心部をA-001とし10m区画で南から北へCライン・Dライン・Eライン・Fラインと横軸を命名し、東西・縦軸は東から10m毎に算用数字の001・002・003・004をあてて区画を設定した。それ故1区画は100㎡の面積を有する。

当地区は、生駒山系の西側斜面から派生する清滝丘陵突端部南側の標高T. P. 14.00mにあり、北は清滝川、南は江瀬美川に挟まれた台地上の、古代河内湖を眼下に望む古人にとって絶好の生活場所で従来から調査を続けている中野遺跡の区域内である。

試掘調査の結果、南棟予定地内から幅約1.0m、深さ約20cmの溝を検出し溝内から土師器片数点が出土した。又、北棟予定地内から地表下約40cmの黄褐色砂質土内から陶磁器片が数点出土した。その際の基本層序は以下の通りである。

#### A 基本層序

調査地の南棟に設定した第1トレンチの北陸断面の基本層序は、第1層芝生、第2層盛土、第3層旧耕土、第4層床土、第5層褐色砂質土となる。各層は東から西へと傾斜し、特に遺構ベース面においては約20cmの比高差が認められる。

第1層 芝生。厚さ約5cmでゴルフ練習場のものである。

第2層 盛土。厚さ約10cm。

第3層 旧耕土。厚さ約10cm。

第4層 床土。ほぼ南北水平に床土が置かれている。

第5層 褐色砂質土。厚さ約10~20cmでCライン・Dラインにおいて認められる。しかしEラインの北棟予定地には厚さ約5~10cmが認められる。

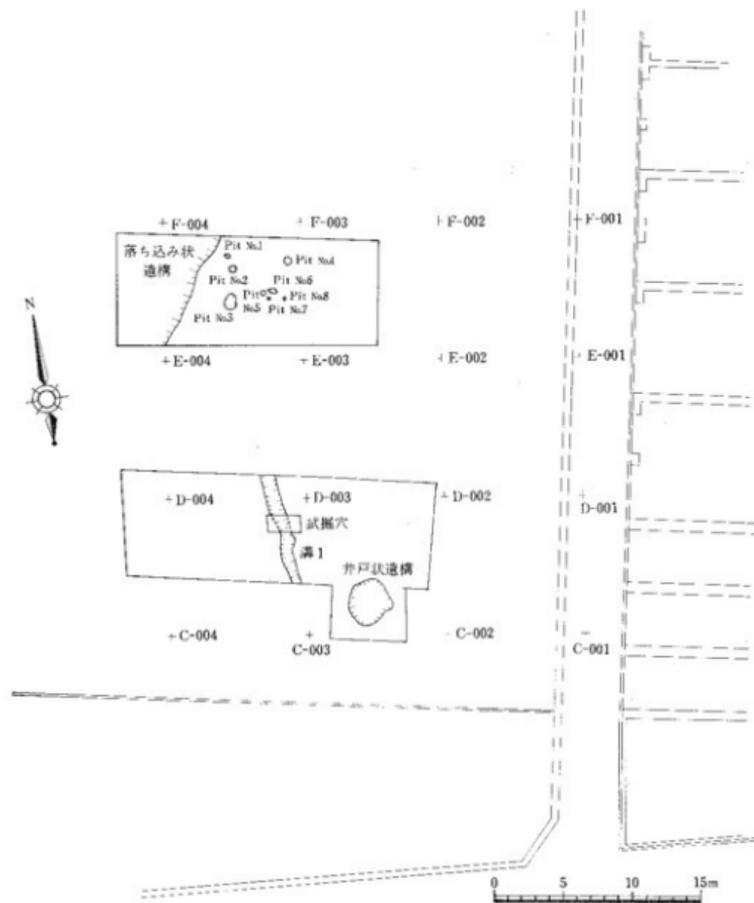
#### B 遺構

今回の調査で検出した主な遺構には、南棟に井戸状遺構・溝1、北棟には掘立柱建物跡・落ち込み状遺構である。北棟の掘立柱建物跡のPitの遺構が地山面である黄褐色粘質土層（やや砂り）から掘り込まれており、出土遺物を比較検討した結果、弥生時代後期、古墳時代後期、鎌倉時代末期の3時期のものがPit内から出土しており、各時期に削平されたことが明らかである。

##### a. 井戸状遺構（第5図、図版3~6・9）

調査地区の東南隅のD-003地区区内で幅2m、奥行検出幅50cmの井戸状遺構を検出した。四條畷地所 西村完氏と協議を行ない遺構の全体を把握するため調査区を南へ4m×5.5m拡大して調査を行った。

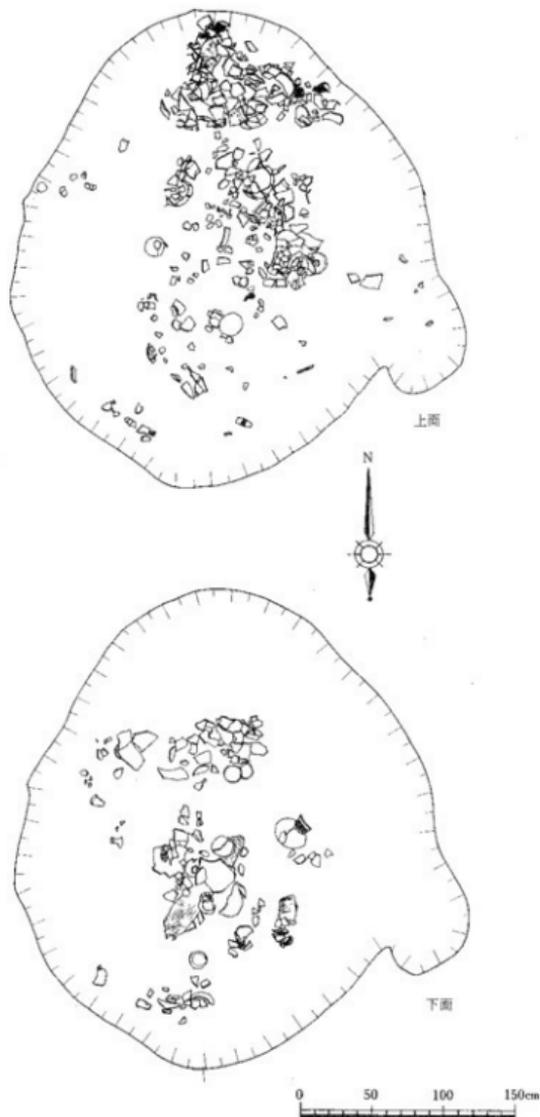
遺構の直径は東西約3.15m、南北3.35mである。底は平底に近い不整形な円形状を呈している。井戸状遺構の肩部は標高T. P. 13.687mで反対に最下層の地山面は標高T. P.



第4図 中野遺跡遺構配置図

12.488mで、深さ約1.2mである。遺構内の堆積土層は、第Ⅰ層褐色砂質土、第Ⅱ層黄褐色砂質土、第Ⅲ層黒色砂質土、第Ⅳ層青灰色粘土、第Ⅴ層暗黄褐色砂質土がそれぞれ堆積している。

次に遺構内の遺物出土状況であるが、遺構検出面（第5図上面・図版3）の北肩部には



第5図 中野遺跡井戸状遺構内遺物出土状況平面実測図

大形壺を細かく砕いた状況が出土しているものや、土師器壺（第6図13～14）、土師器甕（図版15～15）、土師器大甕（図版16～19）、須恵器杯蓋（第6図1～3）、有蓋高杯（第6図一6）、無蓋高杯（第6図一8）、甕（第6図一10・16）、罎（第6図一11・12）製塩土器、滑石製白玉67点、ガラス玉2点、紡錘車1点、勾玉1点等が出土している。これらの遺物はT. P. 13.640m前後に埋められていた。次に下層面から出土した土器には、須恵器甕（第6図一9）、坏身（第6図一4・5）、土師器壺、埴式土器（図版10）、紡錘車、有孔門板、白玉、製塩土器等がそれぞれあげられる。これらの遺物はT. P. 13.380mで比高差からみても約20cm前後であり、土器編年からみても時期差が認められない。又、図版10-1に掲げた石製紡錘車は上面の破片と下面の破片が一致することからみてほぼ同一時期に井戸状遺構内に放棄されたものであろう。

#### b. 溝1（第4図）（図版8）

D-004地区内に溝1を検出した。幅は南部上段で1.1m、下段で0.6m、北部上段では0.6m、下段で0.4mであった。断面はU字形状を呈している。

遺構肩部の標高は、T. P. 13.54mで深さ約22cmである。底部での北端と南端との比高差は約5cmで南から北への水流過程があったものとみられる。

溝内堆積土層の黒色砂質土層から、須恵器坏身、坏蓋、土師器高杯、甕、手捏ね土器、製塩土器、滑石製白玉78点、有孔門板（図版10-4・5）等が出土している。

溝1の検出された長さは、約7.3mであった。中央部には昭和60年6月3日の試掘穴があり、試掘調査時に溝を確認したのがこの溝1であった。出土遺物の状況をみてみると、上記のそれぞれの土器、石製品は試掘穴より北側約2.9mに集中して出土しており、手捏ね土器、白玉、有孔門板などの出土は祭祀との関係で興味深い資料である。

溝1が調査区より南方に続くことについては全く不明であるが、北方についてはF-006地区内には溝1が全く検出されないため、未調査区のE-004内で溝1が終るものと考えられる。

#### c. 掘立柱建物跡（第4図）（図版7・9）

F-004地区内に8個のピットが確認された。ピットの径は20～50cm、深さ20～40cmであった。Pit No.1・4～8内には須恵器、土師器片が含まれていた。又、Pit No.3の規模は1.2 × 0.9mのもので内から瓦器塊、土師器皿が出土している。Pit No.2には弥生式土器畿内第V様式のコシキが出土している。これらのPitは同一面で検出され、遺物からみて弥生時代後期、古墳時代中期～後期、鎌倉時代の三時期のものが含まれていることと後に述べる落ち込み状遺構内から、くらわんか茶碗が出ることから江戸時代のものも含まれ、中世～近世にかけて削平されたことは確実である。

古墳時代のPitによる掘立柱建物跡は、調査地区の北側のG-004や南側のE-004にも続くかと推定され、現段階では掘立柱建物の規模を推測することは不可能である。

#### d. 落ち込み状遺構

F-004 地区内に落ち込み状遺構を確認した。確認した規模は調査区の幅の7.5mである。遺構裾部には杭列が検出され、又断面観察からも一段低い水田であることが確認されたことから、この遺構は水田による落差と考えられる。しかし、水田の西側肩部が調査範囲外のため確認されないことから、現段階では一応落ち込み状遺構として取り扱っておきたい。第3層の青灰色砂質土層内から、くらわんか茶碗等の磁器、摺鉢、須恵器、土師器、瓦器碗、瓦、瓦質土器等が出土している。

出土遺物からみて最も新しい時代のもので江戸時代の陶磁器があり、この時期に水田が作られたものである。

## 第4章 出土遺物

### 概観

井戸状遺構、溝、掘立建物跡、落ち込み状遺構等の発掘に伴って出土した遺物は、土器、石製品、動・植物遺体からなる。土器は古墳時代中期から後期にかけての土器の他、弥生式土器、鎌倉時代末、江戸時代の土器類が数点出土している。大半の土器はD-003地区内の井戸状遺構内に投供された状況であることから、遺物は比較的短期間のうちに堆積したとして扱えられる。

#### 杯蓋（第6図1～3）（図版14）

口縁部は長く、端部は内傾する凹面・内傾する段、内傾する平面の三種を成し、鋭い稜を有し、天井部は比較的深く丸いものと、やや低く平らなものもある。調整は天井部外面に回転ナデ調整が施されている。ロクロ回転は左右両方回転が使用され、成形はマキアゲ、ミズビキである。

(1) 口縁部は下外方に下り端部は内傾する段を成し、稜はやや鋭い三角形の断面であり天井部は比較的深く丸いもの。(2) 口縁部は垂直気味に下り端部は内傾する段を成す。天井部は(1)と同様比較的深く丸いもの。(3) 口縁部は外反して下り、端部で内傾する平面を成し、稜は鋭い三角形の断面であり天井部はやや低く平らである。

#### 杯身（第6図4～5）（図版14）

長いたちあがり有するもので、端部は内傾する凹面、内傾する平面のもの、受部はほぼ水平にのびる。調整は底・体部外面に回転ヘラ削り調整が施され、他は回転ナデ調整が施されている。ロクロ回転は左方回転が使用され、成形はマキアゲ、ミズビキである。

(4) たちあがりは内傾してのび、端部は凹面を呈して、その両角は鋭く、受部はほぼ水平にのび比較的長い。底部は比較的深く平らに近いもの。(5) たちあがりは内傾して端部は平らに近い面を成している。受部はほぼ水平にのびる。底部はほぼ水平にのび比較的浅く平らに近いものがある。

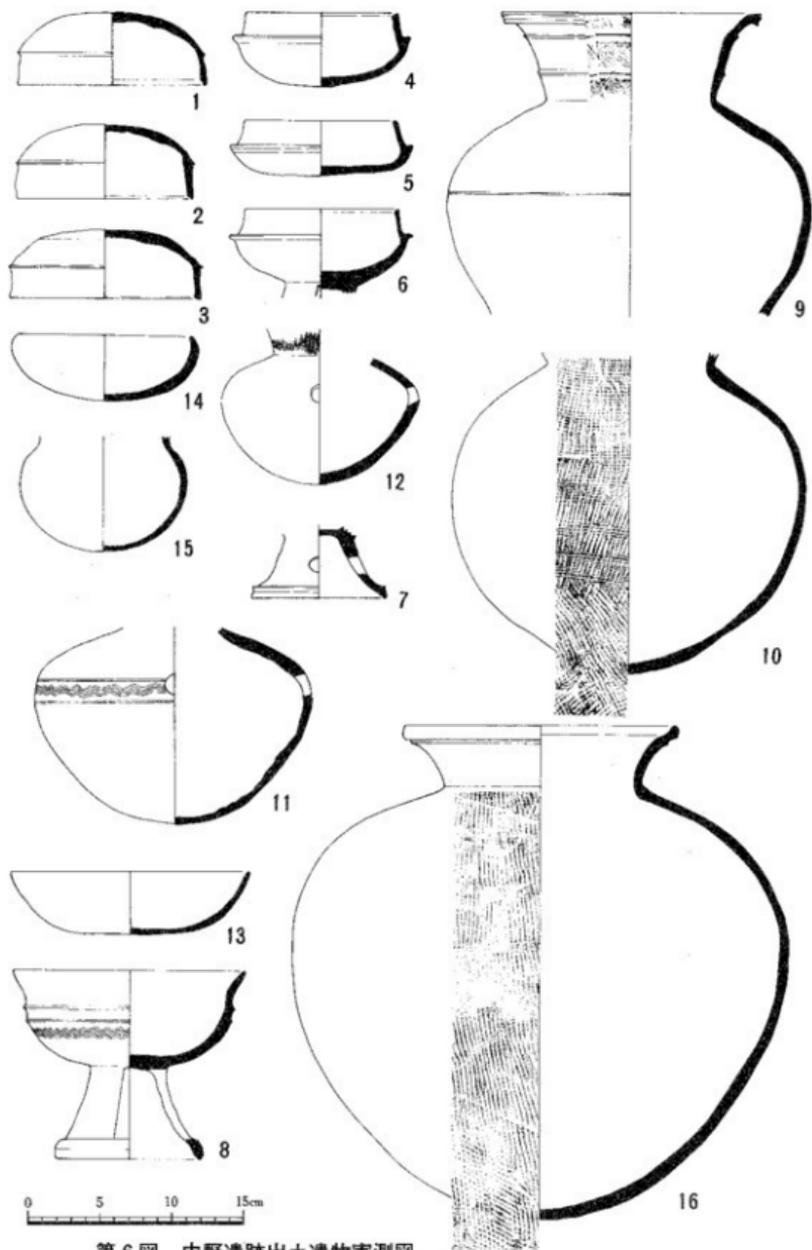
#### 有蓋高杯（第6図6）（図版14）

杯部のたちあがりは外湾ぎみに内傾したのち垂直に立ち上り、端部は内傾する凹面を成す。受部はやや長く水平にのびる。底部は深く丸い。脚部は欠損しており不明であるが、長方形のスカシ窓を三方向に穿った痕跡があり、脚部は垂直に短く下った後、下外方にのび下内方に屈曲するものと推定される。

#### 高杯脚部（第6図7）（図版14）

脚部のみ出土で、脚柱部からゆるやかに裾部に至り、端部近くで段を成し下方に屈曲する。端部は丸く、脚部中央部に円形のスカシ窓が三方向に穿ってある。

#### 無蓋高杯（第6図8）（図版14）



第6図 中野遺跡出土遺物実測図

口縁部はほぼ直立して立ち上り、更に外反して端部は丸くおわる。体部は外反して立ち上り体部に2条の凸線がまわり、その下に5本1条の波状文からなる文様帯が施されている。

脚部は太く外反ぎみにしてなだらかに下方に開き、端部近くで明瞭な稜を成して垂直に下る。端部はやや鋭い。三方に長方形のスカシ窓が穿ってある。

甕(第6図9~10・16)(図版12・15)

形態は、(9) 口頸部は上外方にのび、口頸部に2本の凸帯がめぐり、口縁部は凹面を成してのび、端部は鋭い。肩部は内湾気味に下外方に下る。調整は口頸部の2条凸帯間に12本2条の波状文からなる文様帯が施されている。底部上面に平行タタキ目が施され、内面はナデ調整が施され、それ以外は回転ナデ調整が施されている。口頸部と体部は $110^\circ$ で交差する。

(10) 肩部から底部にかけてのもので、口縁部は欠損しており不明である。体部外面にはタタキの後にカキ目調整をしており、内面は青海波タタキを施した後、回転ナデ調整をしている。

(16) 口頸部は上外方にのび、口縁部近くで1本の凸帯を成した後、垂直にのび端部は丸くとじる。口頸部と体部は $90^\circ$ で交差する。体部外面には、平行タタキ目を施した後にカキ目調整をしており、内面は丁寧な回転ナデ調整が施されている。

罎(第6図11~12)(図版15)

底体部残存のもの2点を数える。

(11) 口縁部は欠損している。肩・体部は横に張った大形球形で、体部最大径は体部中位に位置し、底部は丸味を呈する。体部中位に2本の凹線がめぐり、凹線と凹線との間に6本1条の波状文様帯が施されている。体部外面は $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調整が施されている。底・体部外面は平行タタキ後、不整方向のナデ調整、内面底部には指による押えが顕著に認められる。他は回転ナデ調整が施されている。ロクロ回転は左回転である。成形はマキアゲ、ミズビキである。大型罎であった。

(12) 口頸部は上外方にのびる。口頸部と体部は $100^\circ$ で交差する。肩・体部は横に張った球形で、体部最大径は体部中位に位置し、その位置にヘラ削りを施している。底部は丸味を呈している。体部中位に円孔が穿っており、口頸部外面に波状文が施されている。体部外面の $\frac{1}{2}$ が回転ヘラ削り調整が施されており、体部底面には平行タタキが施され、内面底部は親指の押えが顕著に認められる。成形はマキアゲ、ミズビキである。

土師器壺(第6図13~14)(図版15)

完形品2点を数える。

(13) 口縁部は少し内湾しながら端部は薄くとじる。体部に粘土継接合痕が認められる。調整は口縁を横ナデ調整している他は不明である。

14 口縁部は内湾しながら端部は内傾してとじる。体部外面は横ナデ調整が施され、それ以外は縦方向の刷毛目を施している。内面はヘラ削りの後、ナデ調整を施している。

土師器甕 (第6図15) (図版15-15) (図版16-17・20)

15 口縁部は欠損しているが類例からみて「く」の字形に外折する小形甕である。最大径を胴部中位にもつ。内・外面ともにスガが付着している。外面全体は器壁が剝離しているために調整方法は不明である。

17 口縁部はやや外湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くとじる。体部中位に最大径をもつ。外面肩部に荒い刷毛目を施し、口縁には横刷毛による調整を施している。口縁内面には刷毛目を施し底部には指圧による整形を施している。

20 「く」の字形に外折する小形甕である。最大径を胴部中位にもつ。内・外面ともにスガが付着し、特に外面中位にスガが顕著に認められる。肩部外面は器壁の剝離が著しい。外面は刷毛目調整を行っている。内面は幅2.5cmの接合痕が認められる。

長胴甕 (図版16-19)

1点だけ出土している。口縁部は「く」の字形に外折する長胴甕で、底部は欠損しているが丸底を呈し、全体に縦方向の刷毛目が肩部から下方向に施されている。

韓式系土器 (図版10)

13点の破片を数える。軟質、陶質のものが含まれており、格子目印き目を施しているものが多くみられる。1点だけ土師器の縄文が含まれている。陶質の格子目の印きは3mm格子が多く、中には2mm格子も含まれる。軟質の格子目印きは3mm及び4mm格子の2種類が認められる。

製塩土器 (図版11・12・16-18)

井戸状遺構内から2,141点の製塩土器が出土している。

図版16-18にみられる製塩土器はほぼ復原可能なもので器高7.4cm、口径2.8cm、最大径4.9cmで口縁部より底部にかけて少し湾曲する下ぶくれの胴部を示すものである。又、口縁部より底部にかけてほぼ垂直に作られたものもある。タタキ目は底部を除き、ほぼ全面に平行に施されている。タタキ目の幅は0.4cmのものと0.25cmのものがあり、又、タタキ目を施されず貝殻による調整を施しているものもある。内面は丁寧にヨコナデによる仕上げを施し、内・外面は指で調整し、指掌紋がついているものもある。

製塩土器の胎土は、土師器甕と同様の粘土で焼かれたものもあり、在地による生産が行なわれたものが含まれている。

焼成を見てみると硬質のものと軟質のものがあり、軟質のものには2次的な加熱を受けたものが含まれている。

器高7.5cm前後のものであるが、口径が3cm前後のものと5cm前後の2種類が認められる。

種子 (図版13)

桃の種子9点が井戸状遺構第4層青灰黒色粘土層内から出土している。長さ2.5cm、幅2.1cm～長さ1.9cm、幅1.7cmのものがある。又、同一層内から長さ1.6cm、幅0.7cmのウリ科の種子20点が同時に出土している。

#### 動物骨 (図版13)

井戸状遺構第4層内から動物の足の骨が出土している。

#### 石製紡錘車 (図版10-1)

井戸状遺構内から1点出土している。滑石製で直径約5.2cm、上面径約2.5cm、厚さ約1.4cm、孔径約0.9cmであった。断面は台形状を呈し、上から下方になだらかな曲線で広がっているが、下端部にいたって垂直になり、その幅は0.4cm程度である。上面と下面は丁寧に研磨されており、無文様である。

#### 有孔円板 (図版10-2～5)

(2)は滑石製有孔円板で長径2.3cm、短径2.2cm、厚さ0.4cmのやや歪みをもった円形を呈する薄い板状の円板で、両面にすり痕を残す。長軸中心線上に1.1cmの間隔をもって直径0.15cmの2個の円孔があげられている。

(3)は長径2.5cm、短径2.2cm、厚さ0.5cmのやや歪みをもった楕円形を呈する薄い板状の円板で、両面にすり痕を残す。長軸中心線上に1.2cmの間隔をもって直径0.2cmの2個の円孔が穿っている。

(4)は長径2.4cm、短径1.7cm、厚さ0.4cmの板状のもので0.2cmの円孔が1方から1個穿っている。円孔以外はすり痕など全く加工面が認められず、生産途中のものとおもわれる。

(5)は長径1.8cm、短径1.1cm、厚さ0.4cmのもので0.2cmの円孔が1方から1個穿っている。この石製品も(4)と同様、加工面は円孔のみである。

#### 白玉 (図版10-6)

白玉は合計167点で、うち滑石製が165点、ガラス製2点が出土している。滑石製は、暗灰色、白黄色、灰色、青灰色の種類に分けられ、径0.7～0.5cm、幅0.5～0.2cm、孔径0.2～0.15cmで上下から側面を削り、中央で稜がつくように整形している。

ガラス製白玉は、青色と緑色を呈し、青色は径0.3cm、幅0.4cm、孔径0.1cm、緑色は、径0.3cm、幅0.1cm、孔径0.1cmであった。

#### 勾玉 (図版10-7)

滑石製で扁平な板石を加工した簡単な作りのもので、全長3.5cm、厚さは頭部で2.0cm、孔径0.2cmである。断面は長方形を呈する。研磨の痕が全体にあり、円孔は逆C字形に置いた一方から穿っている。

## 第5章 まとめ

今回の調査面積約340㎡の中で発見された遺構は、弥生時代後期の柱穴、古墳時代中期～後期の井戸状遺構、溝、掘立柱建物跡、鎌倉時代の柱穴、江戸時代の落ち込み状遺構が確認された。各遺構内から時代決定を行う土器・石製品・瓦等が出土した。

調査で得た史料と遺物をすべて完全に報告するには膨大な量であり、周辺の遺構と合わせて今後調査報告書を刊行していきたい。従って以下、今回の調査区で検出した遺構の時期において過去の7次におわたる調査をふまえて少し補足しておきたい。

第1に今回の調査地点が中野遺跡の南方に位置している。すぐ道路を挟んで南側は住宅地であるが、住宅建設に際して約1mの盛土がなされていることから古墳時代集落跡の南端が今回の地点と考えることができる。しかし、南東約200mの四條畷市立歴史民俗資料館周辺の塚脇遺跡から古墳時代中期の溝内から土師器甕、壺、滑石製勾玉等が出土し、片町線複線化に伴う調査において塚脇踏切北側から中期の竪が出土している。

又、今回の調査地点から南方約300mの南野米崎遺跡を昭和60年2月から3月にかけて調査を実施した結果、幅8m、深さ1.6mのU字状を呈する溝内から、須恵器杯身、坏蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、籾、甕、土師器甕、壺、高杯、甌、埴、製塩土器、手捏ね土器、滑石製勾玉、白玉、紡錘車、有孔円板、剣形石製品、斧形石製品、陶質土器、韓式系土器（平底甕、甌、把手付甌）、加工木製品、馬歯等の各種土器、石製品、木製品が出土した。

今回調査した中野遺跡の井戸状遺構及び溝1内の出土遺物と南野米崎遺跡出土遺物との関連遺物としては、須恵器・土師器の各種の土器はもちろん、手捏ね土器、製塩土器、勾玉、白玉、紡錘車、有孔円板、韓式土器、韓式系土器をあげることができる。すなわち、中野遺跡と南野米崎遺跡の古墳時代人は同一集団とも考えられ、この事はこの遺跡間300m内の今後の発掘調査において解明できると思われる。

第2に多量に出土した玉類については中野遺跡溝1内から出土した有孔円板が円孔を穿っただけの未成品であり玉造り生産を行なう玉造集落が存在した可能性を考えなければならない。現在までに発見されている玉類は次の通りである。勾玉9点、有孔円板28点、紡錘車12点、管玉4点、白玉259点、切子玉1点、剣形石製品3点、斧形石製品1点、盾形石製品が1点である。

第3に井戸状遺構内から出土した2141点にのぼる製塩土器についてであるが、大阪府下で製塩土器を出す遺跡は現在55遺跡で、そのうち四條畷市内では、大阪府下の約1割強にあたる中野遺跡、南野米崎遺跡、奈良井遺跡、南山下遺跡、奈良山遺跡、北口遺跡の6遺跡から製塩土器が出土している。出土点数からみても、中野遺跡の7次におよぶ調査において約5000点以上であり、府下最大の製塩土器出土遺跡でもある。

第4に調査地の北約170mの国道163号南側道に大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴う調

査によって溝幅7mの最下層より馬の下顎が古式須恵器・玉類とともに出土しており、中野遺跡の北東に所在する奈良井遺跡から一辺約40mの方形周溝内に馬1体を長さ2mの板の上に横位の状態で埋葬されていたものや、頭骨だけを切り取り周溝内に土壌を掘りその中に埋葬されていたものを含め、奈良井遺跡だけで6頭分以上の馬を埋葬している例がある。

大阪府下では古墳時代の5世紀から6世紀にかけての馬の出土遺跡は31遺跡が現在までに知られている。

特に河内湖の東岸地域、すなわち生駒西麓の四條畷、東大阪、八尾、柏原の各市に集中していることは、生駒西麓と河内湖との間一帯が馬飼いに適していた地域であり、馬歯、馬骨が出土する遺跡は馬飼いを生業とするムラがあったことを伺わせる。それを裏付けるものとして、四條畷市清滝古墳群第2号墳周溝内から検出本数からみて馬一頭分に当たる馬の歯が一地点から出土しており、馬飼いや馬の飼育の中心地と考えられる。

馬と塩との関係についてみると、厩牧令の規定では、「細馬(上馬)には日に粟1升、稲三升、豆二升のほか塩二勺が給せられ、中馬には塩一勺を給す」となっている。そのことから馬の飼育には膨大な量の塩が必要であり、その塩の生産を行うための集団と中野遺跡との関係も考えなければならない。

第5にF-004地区内Pit No.2から弥生後期のコシキが出土していることであるが、北約200mの四條畷市水道局の工事中に底部に木葉文をもつ弥生土器1点が採集されていたが中野遺跡で確実に遺構に伴って弥生土器が今回出土したことから中野遺跡においても弥生人が住みついていた証拠を見出した。

第6に中野遺跡の中世村落についてであるが、国道163号線の南北側道内での調査において6基の井戸を検出している。6基の井戸の種類は、石組、石組+曲物、曲物であり、井戸の集中する地域が中世村落の中心に当たると考えられることから、今回の調査地は、古墳時代同様、中世村落の南端に位置すると考えられる。

最後に落ち込み状遺構、すなわち水田についてであるが、この水田地が条里制の六条二里十八坪の指称するものであり、周辺の水田区画・耕地の形状調査によって今後条里制遺構を検出することが出来るかもしれない。

又、南野村検地にみられる字地名の堂山西にあたる。

## 第6章 掲載遺物観察表

器 種	杯 蓋	杯 蓋	杯 蓋
図及び図版番号	第6図-1 図版14-1	第6図-2 図版14-2	第6図-3 図版14-3
出土地区	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構
法 量 (cm)	口 径 13.0 器 高 5.1	口 径 12.1 器 高 5.2	口 径 13.3 器 高 4.7
形 態 の 特 徴	口縁部は、下外方に下り、端部は内傾する段を成し、縁はやや鋭い三角形の断面である。 天井部は比較的深く丸い。	口縁部は、垂直気味に下り、端部は内傾する段を成し、縁は鋭い三角形の断面である。 天井部は高く丸い。	口縁部は、外反して下り、端部で内傾する平面を成し、縁は鋭い三角形の断面である。 天井部は平ら。
手 法 の 特 徴	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。
備 考	胎土、密。3~5mmの白色石を多く含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、暗灰色。	胎土、密。0.1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。0.1~3mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、外面、灰褐色。 内面、青灰色。

器 種	杯 身	杯 身	有蓋高杯
図及び図版番号	第6図-4 図版14-4	第6図-5 図版14-5	第6図-6 図版14-6
出土地区	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構
法 量 (cm)	口 径 10.6 器 高 5.2 たちあがり高 1.7 受 部 径 12.4	口 径 10.8 器 高 3.8 たちあがり高 1.7 受 部 径 12.8	口 径 10.7 器 高 — 受 部 径 12.8 脚 底 径 — 脚 部 高 —
形 態 の 特 徴	たちあがりは、内傾してのび、端部は凹面を呈して、その隅角は鋭い。受部はほぼ水平にのび、比較的長い。底部は深く平らに近い。	たちあがりは、内傾して端部は平らに近い面を成している。受部はほぼ水平にのびる。底部はほぼ水平で、一部凹を成し、やや浅い。	杯部のたちあがりは、内傾したのち、直立し端部は内傾する凹面を成す。受部は長く水平にのび、端部は丸い。脚部は欠損しており不明である。杯部と胴部の接合において、三方向に長方形のスカシ窓を有する痕跡がある。
手 法 の 特 徴	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部が回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部が回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯・脚部はハリツケによる。 杯底部外面が程度、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。
備 考	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色	胎土、密。0.1~3mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、密。1~4 mmの白色石を多く含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。 自然釉がかぶる。

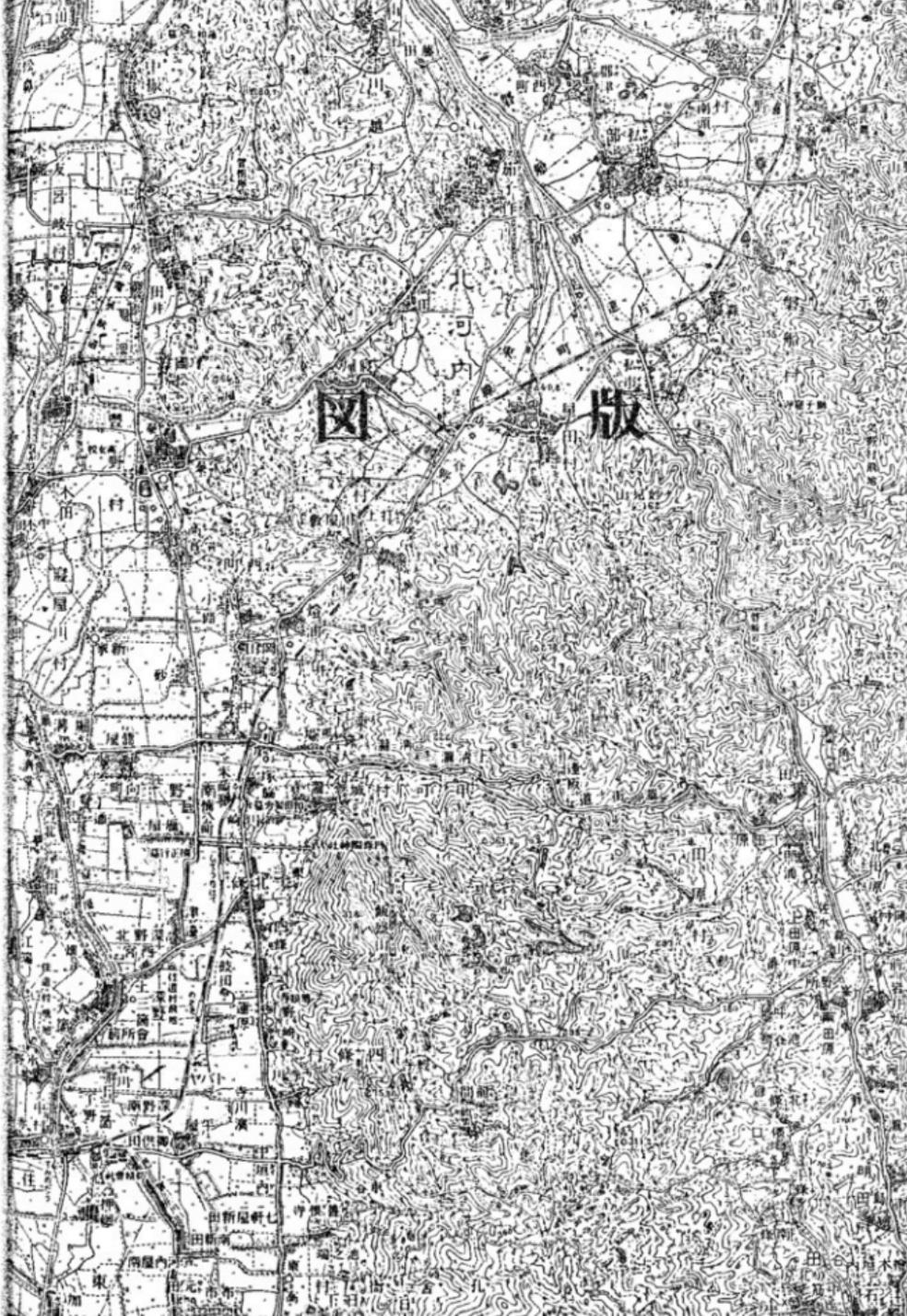
高 杯	無蓋高杯	婁	婁
第6図-7 図版14-7	第6図-8 図版14-8	第6図-9 図版15-9	第6図-10 図版15-10
D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構
口 径 一 器 高 一 受 部 径 一 脚 底 径 9.4 脚 部 高 4.3	口 径 16.2 器 高 13.2 基 部 径 5.4 脚 底 径 10.0 脚 部 高 6.4	口 径 18.0 残 存 高 21.2 胴 径 25.4 口縁部高 6.2 胴 部 高 一	口 径 一 残 存 高 22.4 胴 径 24.6 口縁部高 一 胴 部 高 21.6
杯部は、欠損のため不明。脚部はゆるやかに裾部に至り、端部近くで段を成し、下方に屈曲する。端部は丸い。 胴部中央部に円形のスカシ窓が三方向に穿ってある。	口縁部は、ほぼ直立して立ち上がり、更に外反して端部は丸くとじる。体部は外反して立ち上がり、体部に2条の凸線が回る。その下に5本1条の波状文を施す。脚部は太く外反しながら下方へ開く。端部近くで明瞭な稜を成して垂直に下る。三方に長方形のスカシ窓がある。	口縁部は、上外方へのび、口頸部で2本の凸帯がめぐる。口縁部は凹面を成してのび、端部は鋭い。肩部は内湾気味に下外方へ下る。口頸部の2条凸帯間に12本2条の波状文からなる文様帯を施す。	口縁部は、欠損のため不明。 肩部から底部にかけてのものである。胴部、最大径を中位にもち球形丸底を呈す。 外面は全体に平行タタキ目を施した後、カキ目調整をする。
マキアゲ、ミズビキ成形。 杯・胴部はハリツケによる。 回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯・脚部はハリツケによる。 杯部、底部外面が回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部上面に平行タタキ。 回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面は、青海波文を施した後回転ナデ調整。
胎土、密。5mmの白色小石を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、密。1~6mmの白色小石を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、外面、暗灰色。 内面、灰色。 口縁及び胴部に自然輪がかぶる。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。

器 種	隙	隙	坑
図及び図版番号	第6図-11 図版15-11	第6図-12 図版15-12	第6図-13 図版15-13
出土地区	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構
法 量 (cm)	体部最大径 19.3 残 存 高 13.7	体部最大径 14.0 残 存 高 10.8	口 径 16.6 器 高 4.4
形 態 の 特 徴	口縁部は、欠損のため不明。 肩部は横に張った大形球形で、体部最大径を体部中位にもち、底部は丸味を呈する。 体部中位に2条の凹線がめぐり、2条の凹線間に6本1条の波状文が施す。 体部中位に1.5×1.5cmの円孔が穿つ。	口頸部は、上方へのび、肩・体部は横に張った球形で、体部最大径は体部中位にもち、底部は丸味を呈する。 体部中位に1.3×1.3cmの円孔が穿つ。 口頸部外面に波状文を施されている。	口縁部は、少し内湾しながら端部にいたる。 肩部は薄くとじる。 体部に粘土縫接合痕が認められる。 底部は平ら。
手 法 の 特 徴	マキアゲ、ミズビキ成形。 体部外面は回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。 底部外面に平行タタキ目を施す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 体部外面は回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。 底部外面に平行タタキ目を施す。	内面は、ナデ調整。 外面は刷毛目が施されている。 底部外面は回転ヘラ削り調整。
備 考	胎土、密。0.1~2mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、暗灰色。 肩部に自然釉がかぶる。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、暗灰色。 肩部に自然釉がかぶる。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、赤褐色。

型	変	変	変
第6図-14 図版15-14	第6図-15 図版15-15	第6図-16 図版12-16	図版16-17
D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構
口 径 12.0 器 高 4.6 体部径 13.0	口 径 一 残 存 高 8.0 胴 径 11.7 口縁部高 一 胴 部 高 7.4	口 径 18.8 器 高 34.7 基 部 径 13.7 胴 部 径 34.6 口縁部高 4.3 胴 部 高 30.4	口 径 12.7 器 高 16.3 胴 径 16.2 口縁部高 3.3 胴 部 高 13.0
口縁部は、内湾しながら端部にいたる。端部は内傾をもってとじる。体部最大径は口縁部下0.6mmの位置にある。	口縁部は、欠損しているが、「く」の字に外折し、外上方にのびると推定する。胴部最大径は中位にもち、球形を有する丸底。体部内面に粘土紐接合痕が認められる。体部から底部にかけての外面は表面剝離がひどい。	口頸部は、外上方にのび、口縁部近くで1本の凸帯を成した後、垂直にのびる。端部は丸くとじる。胴・体部は横に張った球形で、体部最大径は体部中位にもち、底部は丸味を呈する。	口縁部は、基部でゆるやかに外湾し外上方へたち上がる。端部は丸い。胴部は、最大径を中位に位置する球形で丸底を呈す。
体部外面は横ナデ調整。 他は縦方向の刷毛目を施す。 内面は、ヘラ削り後ナデ調整。	最大径より下の部分に乱方向の刷毛目が施されている。 内面は、ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 体部外面全面に平行タタキ目を施す。 内面は丁寧な回転ナデ調整。	口縁部は、ヨコナデ調整。 胴部外面に刷毛目を施し、内面は、刷毛目を施し、底部には指圧による整形。
胎土、密。1~8mmの白色砂粒及び小石を含む。 焼成、良好。 色調、赤褐色。	胎土、やや密。1~4mmの白色砂粒を含む。 焼成、やや良好。 色調、暗褐色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、外面、灰色。 内面、青灰色。 胴部の一部に自然釉がかぶる。	胎土、密。 焼成、やや良好。 色調、白褐色。

器 種	製 埴 土 器	長 胴 甕	甕
図及び図版番号	図版16-18	図版16-19	図版16-20
出 土 地 区	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構	D-003 井戸状遺構
法 量 (cm)	口 径 2.8 器 高 7.4 胴 径 4.9	口 径 19.8 残 存 高 33.2 刷 径 25.8 口縁部高 2.2 胴 部 高 —	口 径 14.2 器 高 13.0 刷 径 15.2 口縁部高 1.9 胴 部 高 11.1
形 態 の 特 徴	口縁部より底部にかけて少し湾曲する下ぶくれの胴部を示すもの。 器壁は薄く、底部は平らである。	口縁部は「く」の字形に外折し外反気味に外上方にのびて端部は丸くとじる。 胴部最大径を中位にもつ器形。 底部は欠損している。	口縁部は、「く」の字形に外折する。 端部は丸い。 胴部は、最大径を中位に位置する球形で丸底を呈す。 胴部内面に1.5~2cmの粘土紐接合痕が明瞭に認められる。 口縁部及び胴部は加熱による表面剝離が認められる。
手 法 の 特 徴	口縁部から底部上面にかけて4mm幅のタタキ目を全面に施している。 内面は指圧痕が一部にのこる。 他はヨコナデ調整。	内・外面ともにナデ調整が施される。 内面には刷毛目がわずかに残る。 胴部外面全体に縦方向の刷毛目が施される。	胴部外面は縦方向の刷毛目、底部外面は乱方向の刷毛目を施している。 口縁部及び胴部内面は横方向の刷毛目、底部内面は指圧痕が数多く認められる。
備 考	胎土、密。 焼成、良好。 色調、赤褐色。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、褐色。	胎土、密。1~3mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、褐色。

# 版 圖



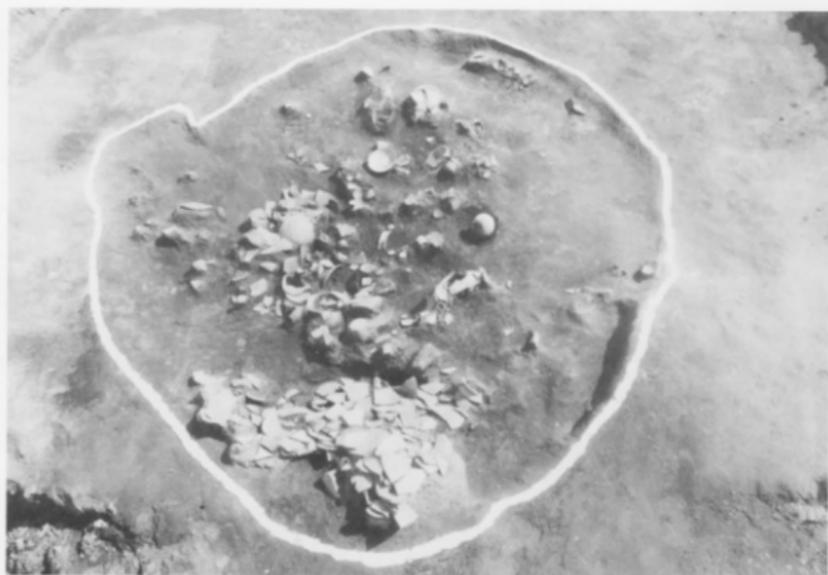
図版 1 中野遺跡周辺の航空写真



図版 2 中野遺跡調査前・後全景



図版 3 中野遺跡井戸状遺構検出面及び上面遺物出土状況



図版 4 中野遺跡井戸状遺構遺物検出状況



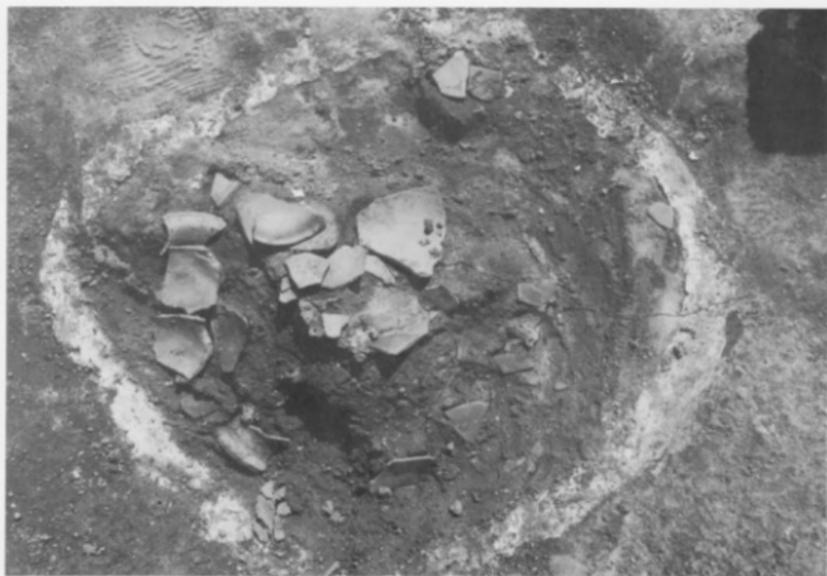
図版 5 中野遺跡井戸状遺構下面遺物出土状況



図版 6 中野遺跡井戸状遺構下面遺物出土状況



図版 7  
中野遺跡掘立柱建物内土器出土状況

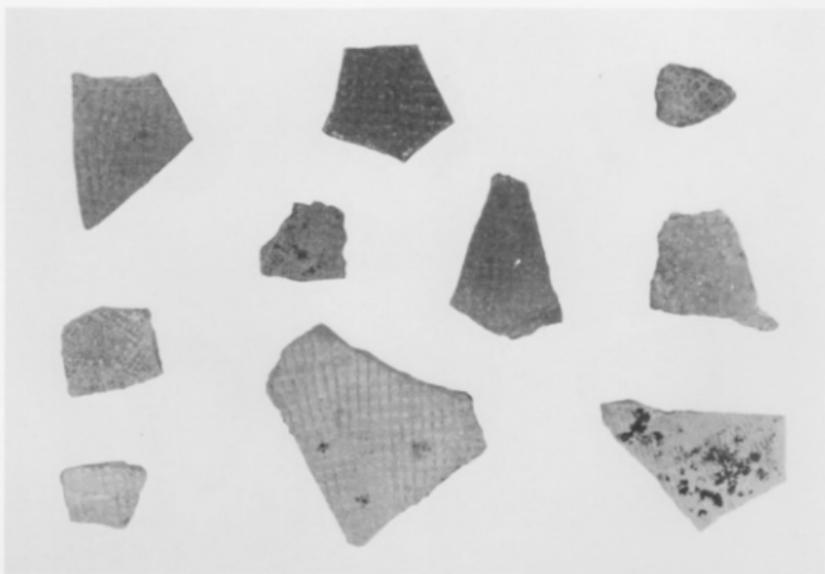


図版 8 中野遺跡溝内遺物出土状況



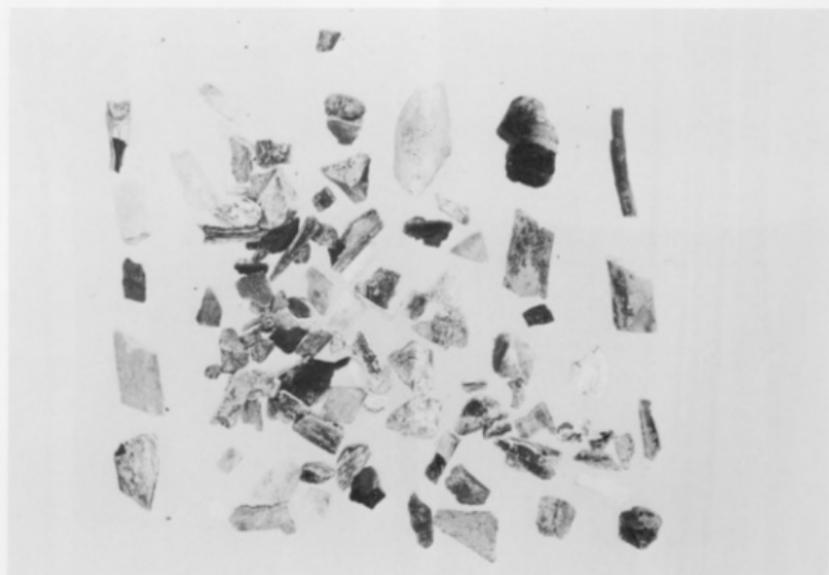
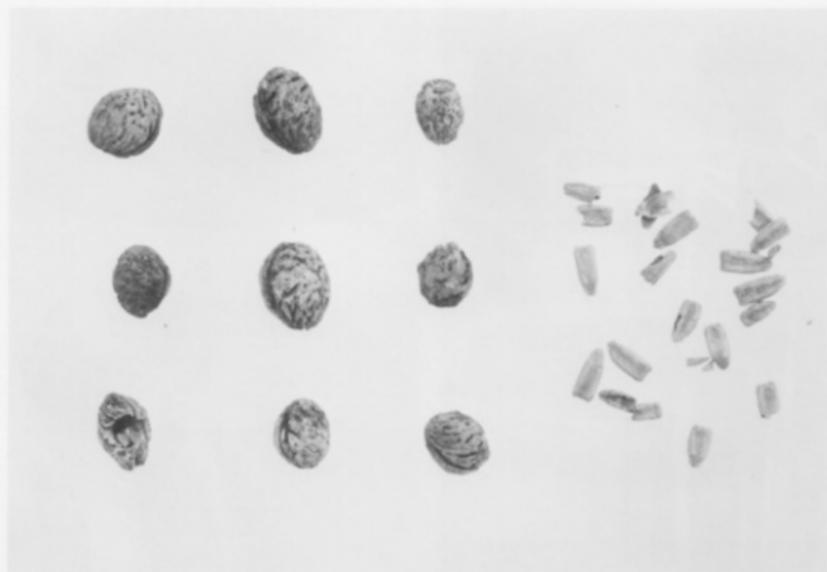
図版 9 中野遺跡 A 地区全景及び井戸状遺構全景

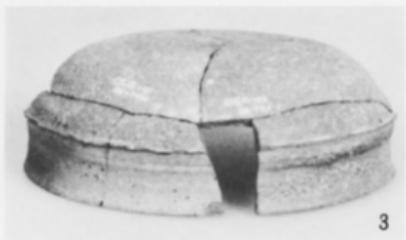
















中野遺跡発掘調査概要・Ⅲ

昭和 61 年 3 月 発行

編集 四條巖市教育委員会

発行 四條巖市教育委員会

〒575 四條巖市中野本町1-1

印刷 田中耕株式会社